

留学体験記

3年4組40番 三宅 美柚

1. はじめに

私はドイツに10ヶ月間留学をしていました。現地では、楽しいことばかりではなく、辛いことやしんどい思いをする事が沢山ありました。しかし、どの体験も私を成長させる大切なものになりました。留学に行かなければ、得る事の出来なかった出会いも多く留学に行けた事を誇りに思います。

2. 序論

私が留学に興味を持ったのは、中学生の時に行った高校説明会でした。そこでは、国際高校の先生方が高校説明の一環で留学の制度について話されていました。その場で初めて高校留学の存在を知り、国際高校と留学共に興味を持ちました。その時から留学してみたいという思いが湧き始め、高校に進学してもその思いは変わることはありませんでした。そして留学団体に応募し、留学できるチャンスを手に入れました。自分の希望する派遣先を選ぶ時には、ドイツを1番に選びました。理由としては、3ヶ国語を話すことが出来たらカッコいいかなといった軽い考えが主でしたが、両親に、治安も安定しているので、英語圏以外ならドイツにしてほしいと言われドイツに決めました。また、留学に行くことで幼い頃からの恥ずかしがりな性格の改善や、自分の価値観を変えることができるのではないかと期待していました。

3. 本論

東京の空港で同じドイツに行く留学生と合流し、母と祖母に別れを告げ、夜の12時に飛行機に乗り込みました。飛行機に乗っても、これから1年見知らぬ国で生活するという実感がわかず、どこか小旅行をするかのような気分でいました。飛行機に乗って数十時間後、いよいよドイツに到着しました。今までにない約1日の長旅だったので疲れ切っていました。空港内の雰囲気は圧倒され、疲れが飛んで行きました。空港で、私達をサポートしてくれる方達と他の国から来た留学生と合流し、各々のホストファミリーの家へ向かいました。電車を2本乗り継いで案内された町はkissingという町で郊外にありました。3人の留学生と共に電車を降りると、1人の女性がこちらに向かっているのが見えました。明るい短髪が似合うその人は自分がホストマザーのAnnだと自己紹介し、車で家まで連れて行ってくれました。ホストマザーの彼女はドイツ語のみを話す人で、コミュニケーションにすごく苦労しました。ですが、緊張して縮こまる私に冗談を飛ばし、時にはハグをしてくれる快活でとても優しい人でした。

同じ家に住む留学生はアイルランド、ブラジル、チリの子達でした。私はアイルランドから来たオラという女の子と同じ部屋に住むことになりました。オラはとても優しい子で、たどたどしい英語しか話せない私に何度も話しかけてくれました。

Annさんの家で生活する期間は2週間とあっという間で、その間はドイツ語の語学学校に通っていました。ドイツ語での手遊びや、私たちが考える想像の動物を発表したり、子供がするような授業でしたがとても難しく、ドイツ語と英語が思うように話せないながらも、一生懸命コミュニケーションを取り、時には涙が出るほど大変な思いも感じながら2週間を過ごしました。言語はこの期間では上達することはなかったですが、何もかもが初体験の出来事で溢れており、新鮮な楽しさやコミュニケーションの重要性を知る事が出来ました。

ホームステイ最終日、続々と旅立つルームメイトを見送りホストマザーと2人、私の新しいホストファミリーが迎えに来てくれるまで待っていました。そしていよいよ、チャイムが

鳴りました。緊張を抑え、30キロもあるキャリーケースを引きずりながら玄関を出ました。そこには貰った写真どおりのホストファミリーが待っていました。Annさんとハグを交わし、寂しい気持ちを抑えて新しいファミリーの車に乗って次の街に向かいました。

約5時間後、車酔いでへとへと私のを迎えてくれたのは美しい街並みと素敵な家と美味しいピザでした。Erfurtというクリスマスマーケットが有名な街に住んでいるファミリーたちは食事の時間に詳しく自己紹介してくれました。両親、男の子、女の子で構成されているファミリーはとても優しく面倒見が良く、何度も助けてもらいました。次の日、ホストブラザーに連れられてきた先は学校でした。今日から学校が始まるらしく、私も登校しないといけないと彼は言いました。初対面続きで緊張する心を奮い立たせて、教室に足を踏み入れました。そして自己紹介も特にせず、一限目が終わりました。拍子抜けしつつ、新しい授業に移動しました。しかしそこでも自己紹介せず、結局英語の授業のみ自己紹介することになりました。しかしそこで受けた怒涛の質問攻めを何とか交わし、疲れ果てて家に帰りました。夕飯の時に今日の事について話し、眠りに着きました。

平日の朝7時半に学校に行き、午後2時半に帰る生活が始まりました。私が通った学校はキリスト教系の学校で隣に教会があったり、宗教の授業があり新鮮で興味深かったです。しかし、授業が全てドイツ語だったので、理解することにとっても苦労しました。挨拶程度しか出来ない能力では先生が何を言っているのかも分からず、またクラスメイトの会話にもついてゆく事も厳しく、辛い思いを抱えたままの学校生活がしばらく続きました。暗い表情の私を見かねたホストペアレンツが、どうしたの？と声をかけてくれた事をきっかけに、悩み事を伝えました。自分の事を話すのは苦手でしたが、真摯に話を聞いてくれ、抱きしめてくれたファミリーに安心し、相談して良かったと心から感じました。自分が助けを求めたら助けてくれる人がいると認識できたことで気持ちはだんだん晴れてゆき、ホストファミリーとの仲も深まりました。それから放課後、語学学校に通うことになり、少しずつドイツ語が上達していくなかで、友達が増えてゆき、楽しい思い出も増えていきました。友達と電車を乗り継ぎショッピングに行ったことや、家に泊まらせてもらったことは忘れられない思い出になりました。

ホストファミリーはクリスマスマーケットなど様々なイベントに積極的に連れていってくれました。彼らのサポートなしでは、こんなにも学びの深い留学をする事が出来なかったと思います。帰国が近づいて来た時も、ファミリーにずっとドイツにいていいよと言われ恋しい気持ちが溢れました。そして空港でハグと手紙を受け取り、寂しさを抱えて帰国しました。

4. 結論

留学は必ずしも楽しいことばかりではありませんでした。言葉が伝わらない歯痒さや会話の輪の中に入る事が出来ない、また入れても話が續かない自分への嫌悪感や、日本との差にカルチャーショックを覚えることも多々ありました。しかし、身近な人に相談したり、成功体験を一つ一つ重ねていく事で自分に自信を持ち、人に相談して頼ることの大切さを学びました。様々なバックグラウンドの人達と関わっていく中で、自分の常識に変化を感じ、より物事を様々な視点で見ることができるようになったと感じています。

5. おわりに

留学で身につけたこれらの経験や学びを決して忘れず、これからも生活していきたいと思っています。また、留学中に様々な国の人達と出会う事が出来たのが印象に残っており、その人達を通して様々な国に興味を持ち、異文化を知ったり、会話をする楽しさに気がつきました。日本でも様々な人達と交流できる場に行き、色んなバックグラウンドを持つ人達と話して自分の考えの幅を広げ続けたいと考えています。